

派遣者番号	管R2K11	氏名	長谷川 俊和
研究主題 —副主題—	児童を称賛する教師行動に関する一考察 —自尊感情・自己肯定感を育む観点から体育の学習評価を見直す—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	鈴木 直樹
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	小寺 康裕

キーワード：称賛 自尊感情 自己肯定感 学習評価

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

自尊感情・自己肯定感を高めるために、教師が児童のよいところを積極的に称賛することが有効であると考えられている(教育再生実行会議, 2017)。

教師の称賛は、児童が学校生活に適応すること、教師と児童の人間関係により影響を与えることに有効であるとされている(古市・柴田, 2013)。また、体育科教育の研究においても、教師の称賛は、児童の授業評価を高めることに有効であると主張されている(高橋, 2000)。

一方で、称賛された児童は、プレッシャーを感じ、学習意欲が高まらないなどの課題も指摘されており、教師の称賛が、必ずしも有効な教師行動とは言えない(高崎, 2013)。

そこで、本研究では、自尊感情・自己肯定感を育む方法と児童を称賛する教師行動について検討する。そして、体育の学習評価の具体的な方法を提案し、授業実践を通して成果と課題を検証することを目的とする。

2 研究の方法

自尊感情・自己肯定感を育む方法及び称賛する教師行動に関する先行研究を概観した。その結果を基に、教師の学習評価について具体的な方法を開発した。開発した方法を活用した授業実践(小学校6年生・跳び箱運動・5時間)を行い、その全授業をビデオ録画した。その授業記録から、教師と児童が関わっている場面を分析した。単元終了後、授業者を対象に、教師行動の意図についてインタビューを実施し、研究の検証及び考察を行った。

3 研究の結果

(1) 自尊感情・自己肯定感を育む方法

自尊感情・自己肯定感を育む方法を三点に分類した。第一に、肯定的な他者評価を基にして、児童が自己評価を高める方法である。第二に、自分らしさや個性等、児童が自己価値を認識する方法である。第三に、教師が児童を無条件に受容することにより、児童が少しずつ自己を肯定的に捉える方法である。

第一、第二の方法は、教師が評価規準に基づいて児童に称賛を与えていることから、称賛されない児童が生じてしまうことに課題がある。

第三の方法は、知識・技能の習得状況、学習に取り組む態度にかかわらず、教師が児童を無条件に受容する方法であることから、児童は、安心して学習に取り組むことができる。

これらを踏まえて、教師が児童のありのままの姿を受容し、児童に安心感を与える学習評価法を検討した。

(2) 学習評価法の検討

体育の授業において、教師は、評価規準に基づいて児童に言葉を掛ける。十分満足できる状況(A)と判断すれば、称賛する言葉(肯定的フィードバック)を掛ける。一方で、努力を要する状況(C)と判断すれば、動きを修正する言葉(矯正のフィードバック)を掛け、おおむね満足できる状況(B)以上になるように指導を行う。

このように、教師は、観察、評価、フィードバックという教師行動を繰り返し行い、児童の学習改善を図る(図1)。

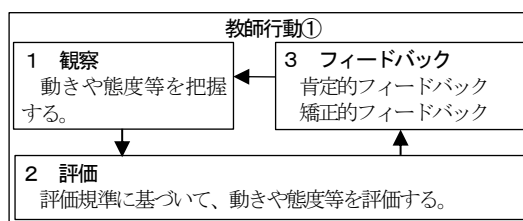


図1 一般的な学習評価のサイクル

しかし、教師の評価規準と児童が評価してほしいことが一致しない場合、教師が児童の学習改善を図ることは困難である。すなわち、教師は、児童の内面を把握した上で、児童を評価しなければならない。

以上のことから、児童を評価する前に、児童の内面を把握する教師行動が必要であることが分かった。

(3) 学習評価法の開発

児童を受容し、安心感を与えること、また、児童の内面を把握することが、教師には必要である。そこで、わが国の心理療法やカウンセリングに影響を与えた人物の一人であるロジャーズ(1967)に着目した。

その結果、次のような知見を得た。

- ・児童の学習成果をすぐに価値判断しない。
- ・すぐにフィードバックを与えない。
- ・児童の気持ちや考えに寄り添う。
- ・児童の気持ちや考えを尊重して、学習する機会を与える。

これらのロジャーズの知見を基にし、図1の観察と評価の間に、受容を取り入れた。

このように「観察(Observation)」、「受容(Acceptance)」、「評価(Assessment)」という評価プロセスを、本研究ではOAAサイクルと呼ぶことにした(図2)。

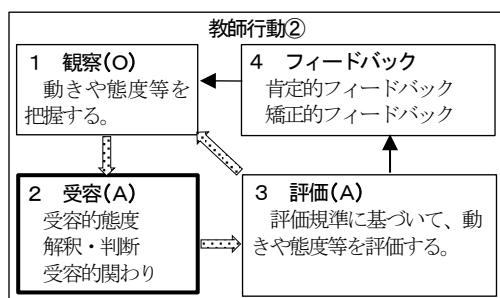


図2 受容を取り入れた学習評価のサイクル (OAAサイクル)

受容とは、受容的態度及び解釈・判断、受容的関わりで構成された教師行動である。

ア 受容的態度

教師は、児童の学習状況に対して、価値判断することを保留し、児童の気持ちや考えを把握するために問い掛けを行う。

教師は、問い掛けに応答する児童を、過去の児童の姿と関連付けて評価をしない。また、児童の言動に対して、肯定も否定もせず、児童のありのままの姿を受け入れて、話をよく聴く。

イ 解釈・判断

教師は、児童の言動から、その学習活動を「なぜ」、「どのように」行っているのかなど、児童の気持ちや考えをより深く理解しようとする。

ウ 受容的関わり

「受容的関わり」は、「子供の気持ち理解」、「子供の気持ちの尊重」、「存在の肯定」、「期待・承認」の四つのカテゴリーで構成されている(角南, 2013)。教師は、児童の言動を解釈・判断した後、受容的関わりを選択する。

(4) 授業実践

ア OAAサイクルを意図した教師の姿

授業者は、問い掛けを積極的に行い、場や技の選択等、児童が意思決定したことを承認していた。また、児童の合理的ではない行動や理解に苦しむ言葉に対して、すぐに指導・助言を与えずに、児童の行動を観察し続けた。

イ 授業で見られた児童の姿

児童は、場や技を自ら選択し、試行錯誤を繰り返しながら運動に取り組んでいた。また、他者評価に基づいて自己の動きを追求するのではなく、技に取り組んだ時の感覚を言語化するなど、自己評価を繰り返しながら、運動に取り組んでいた。

ウ 授業者に実施したインタビューの結果

授業者は、「称賛や指導・助言を与えることを意識的に抑えていた。」「児童が自己評価に基づいて、自ら課題を設定することを期待していた。」「児童の姿や言動の意味を捉え直しながら、授業をしていた。」と、教師行動の意図を述べた。

4 研究の考察

OAAサイクルの効果を検証した結果、以下の四点の知見が得られた。

- ・児童は、安心して授業に参加し、自ら意思決定を行いながら運動に取り組む。
- ・教師は、積極的に問い掛けを行い、児童の気持ちや考えを把握する。
- ・教師は、児童の実態に応じた的確な言葉掛けを行う。
- ・フィードバックを求めている児童に対し、教師が観察を続けることに課題がある。

5 今後の展望

本研究の結果、OAAサイクルによる学習評価は、教師・児童相互に有効であることが示唆された。本研究は、1クラスの一単元を対象とした限定的な事例研究であった。OAAサイクルの有効性について、定量的な研究に取り組み、客観的に仮説検証していくことで、学校現場で活用可能な学習評価法として価値付け、普及させていきたい。